

事業報告書（令和4年度）

事業名 _____ 栽培から始める手仕事の会 _____

団体名 _____ 手紡ぎの会 ふわふわ _____ 担当者名 _____ サチダナンド世志花 _____

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

主に隔週の水曜日、月に1~2回、古民家サロンを利用して常時3~5名ほどが利用。どなたでも歓迎、老いも若きも男女問わず、いろんな人が参加、体験しました。日常の忙しさや孤独を忘れて、ゆったりと同じ思いで集まった優しい人たちと綿や羊毛を紡ぐ時間を共有した。現代は、便利さの中で当たり前前に物が右から左へと消費され、捨てられていく時代。一枚の布はどんなふうにできているのだろう。昔の人はが植物や動物からゆったりと紡ぎ、織り、服を作った工程に思いを馳せながら、一人一人が作品に仕上げるのを目標に紡ぎを学び、体験しました。地域の交流の場として、伝統的な農芸を極める手始めの場として活用される場になりました。

2. ESDの視点

①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

綿の布ができるまで、まずは綿の栽培から。収穫して、実を綿繰りの作業をして、ゴミや種をとり、綿をほぐし、糸を紡いでいく、途方もない工程を体験して、一枚の布の大切さ、綿という植物のありがたさや美しさを体験しました。安易にものを浪費して、簡単に捨ててしまう生き方そのものを振り返り、物や昔の生き方を大切にする気持ちが芽生えました。

②どのように学び合いを取り入れたか

地域の専門家に指導していただき、道具もお借りしながら、道具の使い方から紡ぎ方まで、一人一人に寄り添った指導を受けた。昔の道具をリサイクルし、メンテナンスも学びながら、昔の文化の復興も担う。互いに学んだことを分かち合うことで、さらに理解と技術を深めていった。また地域の年配者には昔アンゴラ山羊を飼い、紡いでいた方々のグループがあり、交流をすることで学びを得ることができた。道具の使い方なども学んだ。youtubeや、インターネットも活用し、技術の向上に努力した。

③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

綿や羊毛を、元の姿の状態からどのように素材を供給するかということから学びはじめた。綿は畑からの有機無農薬栽培し、たねまき、育苗を経て定植、花が咲く頃には支柱を立てて、収穫までを体験した。羊は、地域の牧場で毛刈りを見学し、洗い、乾燥を学んだ。素材が1からどのように利用されるまでの工程があるのかを地域の協力のもと、実践を通じることができた。大変稀な貴重な体験と学びで、参加者からは大好評であった。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

事業計画書に記した目的、目標は概ね達成できた。

参加者と共に、畑の学びから、家庭で実践できる有機無農薬栽培の方法で、綿を収穫することができた。その綿を加工して糸を紡ぐ作業をこれからも持続的に学んで行き、体験の機会のある場として活動を展開する。また技術向上も目指し、人材育成も視野に入れたワークショップも開催した。

また、地域の羊牧場と連携し、交流を深め、羊毛の体験もすることができた。

羊毛を季節に刈り、洗い、乾燥させゴミを取り、染める作業を体験し学んだ。

牧場や地域の年配者との交友を深め、地域のコミュニティの活性化や昔の技術の伝承にも触れ、今後も地域での優しいつながりを続けていく。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域のESDの取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

使い捨ての浪費社会のあり方に問題を提議し、会では素材を一から手作りすることで、物の大切さや価値、ありがたさを感じ、自分の生活を見直すことを提案した。

中山間地域で過疎が進む町に、魅力ある活動を展開し、地域のイメージアップに貢献した。安心安全な畑の土作り、畑仕事を通じてその延長にある生活や手仕事に目を向け、質素ながら生きる喜びを感じられる、地域とのつながりのある、優しいコミュニティづくりを展開している。

綿の種はまた来年も畑に還り、持続可能な循環型農業の雛形として啓蒙活動していく。

地域の年配者からも技術を受け継ぎ、世代に渡り、伝統的な農芸を繋いでいく人材を育成、技術の向上を目指すことも大切な活動の一部である。